

東京女子大学

理事長 原田明夫様

学長 湊 晶子様

2008年7月10日

東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会 顧問

日本大学名誉教授 日本建築学会名誉会員

山口 廣

### 東京女子大学旧体育館保存要望書

私は近代建築の研究調査を続けている一介の研究者で、身内に貴大学に学んだ者はありません。ただ、貴大学キャンパス内の貴重な近代建築群のかけがえのない一部が消え行くのを惜しみ、その建築学的価値を述べ、保存への再考を強く求めたく、発起人会を代表して一文を草し、お届けいたします。

第一に、貴キャンパスの設計者アントニン・レーモンドについて、再考を求めたく思います。ご承知と存じますが、A.レーモンドは帝国ホテル設計のため来日したF.L.ライトの設計助手として来日します。F.L.ライトは世界的に高名な建築家であり、日本滞在中に自由学園校舎・山邑邸など現存国指定重要文化財となっている作品も残していますが、昭和7(1932)年、帝国ホテルの仕事が終わると帰国し、再び日本を訪れることはありませんでした。A.レーモンドは帝国ホテル竣工後も日本に残り、この国の近代建築発展に尽くす決心をします。彼は明治のお雇い外国人建築家と異なり、日本において、常に世界の最先端の建築技術とデザインを目指し、己の建築作品に用いています。既に姿を消した東寮では、軽快なリズムを形成していた五角形の壁柱と、軒下の臥梁と、一階のコンクリート床を一体化することで安定した構造を実現しました。また旧体育館においては、屋根の小屋組みと、屋根面のコンクリート板と、同じくコンクリート造の豕叉首(いのこさす)を一体化して、構造的に安定化させ、耐震性を高めています。このほか、本館の中央部の広い吹き抜け空間を支えるのに、太い柱の代わりに四本の細い柱をそれぞれ建て、吹き抜け空間と屋根を支えています。こうした、当時としては極めてユニークな建築構造的工夫を至る所で用いています。

彼、A.レーモンドはまた、日本の木造建築の良さも的確に理解していました。彼の設計した軽井沢の聖パウロ教会は、故郷ポヘミヤの教会のイメージを用いながらユニークな木造教会の形を創り出しており、貴大学の建築群と共に「日本における DOCOMOMO 100 選」にリストアップされています。

もう一つ、建築家A.レーモンドの功績として見逃してならないのは、彼の事務所から

後に日本の近代建築の先駆者となるような人たちが育ったことです。前川國男、吉村順造、増沢洵、ジョージ・ナカシマ、杉山雅則などなど、その後の日本建築界を担う建築家たちを育てています。そのことは、昨年、鎌倉の近代美術館でレーモンド夫妻の展覧会が開催された折りのパンフレットに、鈴木博之東大教授が巻頭論文「レーモンドがもたらしたもの」で詳しく述べています。レーモンドは東洋の一隅にあって、常に欧米の近代建築の進歩に遅れまいと努力します。その彼の姿が、自ずと所員（弟子）たちに日本のパイオニアにならんとする気概を植えたのだと思います。

第二に、今は姿を消してしまった東寮を含め、寮生活をなさった方から、女子大の寮でもストームがあったと聞き、深く印象に残りました。

私は戦中派で、旧制の中学・高校で学びました。高校は3年間寮で過ごしました。そして入寮早々にストームの洗礼を受け、やがて上級生になると教師の制止を振り切って下級生たちにストームをかけに、秘かに勝手知った寮の暗闇の中を走り回りました。自慢話をするつもりではありません。ストームはとても大切な行事です。なぜなら、新入生はそれまで育ったそれぞれの家庭と親の生活と意見を身に付けたまま寮に入ってきます。しかし、何時までも大家のボンボンであったり、片親で苦労を重ね頑なになっている者も、寮では平等に一人の個性を持った生徒として扱わねばなりません。彼らが背負ってきている肩書きや思いこみを捨てさせ、同じ対等な一人の裸の人間として生活と勉強を始めませんと、寮生活は成り立ちません。そうした寮生たちの営みも含め、建学の精神のこもった東寮が既に失われてしまったことは、返す返すも残念でなりません。

第三に、「旧体育館」が「体育兼社交館」と呼ばれていたことを知ったときの驚きと喜びです。先に記しましたように、寮生活は肩書きや家庭の躰けを離れて、裸の個性をぶつけ合い、それぞれの家の息子から、一人の大人に成長する場所でした。しかし、若い生徒同士の錬磨には、図抜けた天才の混じっていない限り限界があります。ですから、宿直の教師の所に駄弁りに行くのは、必然の慾求からでした。旧体育館には暖炉のある小部屋が四隅にあります。これらの暖炉のある小部屋は、生徒同士だけでなく、生徒と教師の語らいの場として最高の場であったように思います。ライシャワー館や安井記念館のような教師館を訪れ、教えを乞い、悩みを打ち明け相談することもあったかもしれませんが。しかし、教師の宅まで出かけてゆくのは、勇気の要ることです。社交館の小部屋なら、もう少し気楽に教師と話せたでしょう。そんな時、教師が、私も若いとき一度は死ぬことを考えたなどと話されると、思わずこちらも身を乗り出してしまいます。そんな人間形成に大切な生徒と教師の交流が、この旧体育館（社交館）の小部屋でなされたのではないかと思います。ここは単なる体育館ではなかったのです。もっと豊かな人間形成の場であったのではないのでしょうか。

私は小学校から大学院まで、幼稚園を除く総てのレベルの教育に携わり、教壇に立つ

てまいりました。結論から申せば、教育は人にあり、物（施設）は従です。大学の経営者としては、施設設備を整え、環境を整備し、受験生の評判を良くし、経営の安泰を計りたいお考えかと存じます。私は頼まれて、田舎の小学校の校舎保存のための見学に出かけることがあります。案内してくれる卒業生たちは、一生懸命ガラス窓を拭き、ぬか袋で廊下を磨いた思い出を話し合っています。彼ら卒業生にとって、思い出が一杯詰まった大切な校舎なのです。学校の校舎というのは、そこに学んだ人たちにとって掛け替えのない建物なのです。

東京女子大学の経営に関わっておられる皆さまも、それぞれ昔の学び舎の思い出をお持ちと存じます。それは無条件で懐かしく、何時までも心の糧になっていることでしょう。同じように、この東京女子大学に学び、多くの思い出を心に抱きつつ巣立った方々の心の拠り所を、少しでも大切に残して下さるよう、切にお願い申し上げます。

東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会 発起人  
1943 年国語専攻部卒 作家  
近藤 富枝

### ねがい

私はいま、満 86 歳になりましたが、この年月我が家のリビングにも書斎にも東京女子大学の建物の写真を何枚も飾り、ひたすら眺めつづけております。いつまでも学校離れをしない人と批判の声も聞きますが何のそのです。十五年戦争のまっただなかに私の入学した大学が、軍や文部省の圧力をもものともせず、学問の自由を守りぬいた姿をまのあたりに見た者の、これは深い感動と熱い尊敬のあらわれなのです。

さらに、女性を男性と同等の者として扱うこと、また“学問のための学問”を教えるところとして東京女子大学は当時の日本で女性にとって唯一無二の場所であったことも忘れてはならないと思います。

あの寮の構造はそれらの理想の顕現として一人一室で戦前の日本では考えられないことでした。体育館 2 階の一隅に今も残っている丸い大きな穴をご存じでしょうか。私たちが学生のころは太い鉄の棒が穴の中央にすえられていました。更衣室から階下へいくのに鉄棒に手をかけスルスルとすべっていくのです。消防士のように……。このことにも女性の力にいささかも制約を与えたくないと考えた大学の意志を感じます。

さて、建学のころの新渡戸、安井両先生のお心の残る建物を西荻のキャンパスから一

つでも失っていいものでしょうか。卒業生と関係者の皆さまに考えていただきたいと思  
います。

昭和 18 年 9 月 繰り上げ卒業  
安井学長の教えを受けた最後の学年で、  
倫理を御教授いただきました。

山口廣氏の「要望書」のご趣旨に賛同し、近藤富枝氏の「ねがい」に共感します  
東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会 発起人一同

青柳真智子（立教大学名誉教授）  
今 市子（漫画家）  
内田 青蔵（埼玉大学教授）  
江口 裕子（東京女子大学名誉教授）  
大藪 郁子（劇作家）  
尾崎左永子（歌人）  
兼松紘一郎（建築家）  
小西 敏正（宇都宮大学教授）  
C.Lee Colegrove（東京女子大学名誉教授）  
近藤 富枝（作家）  
篠田 靖子（金城学院大学名誉教授）  
篠田 義男（建築家）  
陣内 秀信（法政大学教授）  
杉森 長子（元日本女子大学教授）  
瀬戸内寂聴（作家）  
時枝 俊江（記録映画監督）  
鳥山 明子（荻窪南教会牧師）  
永井 路子（作家）  
永原 和子（女性史研究家）  
名古 則子（元東寮寮監）  
根岸 愛子（東京女子大学名誉教授）  
藤岡 洋保（東京工業大学大学院教授）  
鞠子美代子（東京女子大学名誉教授）  
吉家千絵子（Casa BRUTUS 編集長）  
乗 浩子（元帝京大学教授）